



KYODO ARCHITECTS & ASSOCIATES

2026



INDEX

人口減少社会の中で

・・・02

TOPICS

多様な患者と家族を受け入れるゲートの再構築

こころの医療センター五色台 ・・・03

[精神科病院 増改築・改修]

地域の「拠りどころ」となる病院

メンタルケアホスピタルみらい ・・・05

[精神科病院 移転新築]

WORKS

みらいリハビリテーション病院

[一般病院 新築] ・・・07

しぶさわセントラルクリニック

[診療所 新築] ・・・08

札幌東徳洲会病院

[一般病院 増築・改修] ・・・09

那須中央病院

[一般病院 増改築・改修] ・・・10

千曲荘病院 新西棟・新南棟

[精神科病院 増改築・改修] ・・・11

アネックスM

[福祉施設 用途変更] ・・・12

宰府福祉会 地域生活支援センター

[障がい者福祉施設 新築] ・・・13

INFORMATION

こころが息づく建築

[書籍出版 B O O K] ・・・12

人口減少社会の中で

代表取締役 鈴木 慶治

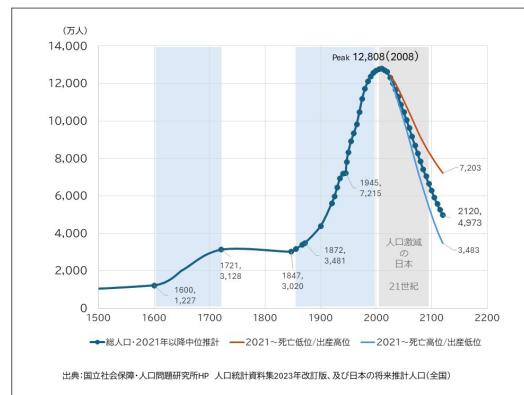
昨年の一年の世相を表す漢字は「熊」でした。実際街にクマが頻繁に出没し社会問題になっていますが、「熊」はここ数年漂う世の中の不安を象徴する言葉ととらえられます。地球温暖化による異常気象が引き起こす森林の異変がクマ出没の直接の要因と報道されますが、人口減少・高齢過疎化による空き家の増加が被害に拍車をかけています。世界を見渡しても、先進国はすべて少子高齢化が進み人口減少が始まっています。このような状況で自国経済の成長こそを是とする社会において、人々は自分に都合の良い論理を振りかざし他人のモノを奪うことが、さも合理的であるかのように振舞います。結果貧富の差を生み争いが絶えなくなります。このような不安定な社会の中では子どもを産み育てる環境は整いにくく、今後先進国が人口を維持することはできないでしょう。強大な国の指導者たちが「熊」に見えます。

共同建築設計事務所が創業した1958年、日本の人口は1億人に足りない程でしたが、戦後復興から高度成長期に大衆が同じ方向を見ている時代。大衆が望むものをつくれば売れる時代で、暮らしはどんどん豊かになり、景気の好不調はありつつも相対的に経済は右肩上がり。私たちも需要のあるままに設計の機会を得、多くの作品づくりの機会に恵まれました。それからちょうど50年で人口がピークに達し、同じ時間をかけることなく人口は急速に減り続けています。しかも少子高齢化が進む中、世代間交流は薄く、価値観は多様化しています。加えて戦後人口が急増した頃に作られた医療経済システムは限界を迎え、私たちが向き合う医療福祉分野は事業経営が厳しい状況にあります。こんな時代であるからこそ、私たちは誰もが共感できる向かうべき方向を模索しています。

混沌とした時代ですが、決して悪いことばかりではありません。人口が半分に減れば、この人間によって整備された国土、環境を一人当たり現在の2倍の広さを享受できるのです。自然に返すべき環境は返し、現在あるの質の良いハーダをコントロールしながら時代にふさわしいものに変化させ、創造することによって「本物の豊かさ」に近づくことができると信じています。その工夫・提案こそ我々設計者の使命であり、長くものづくりを手掛けてきたものの責任であると考えています。

「熊」の存在を受け入れつつ、本来お互いは敵対するものではないことを理解し、この地球に「共生する」もの同士で、分かち合うことを喜びと感じることができるような世の中になって欲しいと思っています。どこかの「鬼」が出てくるテレビCMのような話になってしまいました。

今後とも皆様のご指導・ご鞭撻の程、よろしくお願ひします。



出典 人口統計ラボ「一目で分かる1600年から2120年までの日本人口推移の散布図」



南外観（中央：新館 右3階建：既存病棟）

香川県坂出市にある民間の精神科病院の増改築計画です。医療法人社団五色会は、1978年に現病院を開設。地域医療を支えつつ病院周辺に退院後の支援施設や地域の人々が訪れるカフェ等々を整備し、単なる医療提供では解決できない個々の暮らしも手厚く支援されてきました。その中心である病院は、築45年を経過した外来棟・病棟が中央部に残り、次の展開が見いだせないでいました。そのため、将来大規模デイケア施設への移行を考慮した仮設外来棟を前段として建設し、将来展開を容易にする起点となる外来棟の建替えと共に病棟再編と各所を改修、外構の再構築をすることで病院の印象を刷新する計画です。

■多様性を受け入れる象徴

敷地の東と西には台地状の山が面し、田園風景が広がっています。遠方には瀬戸大橋も望め、豊かな緑に恵まれた環境です。

既存病棟の間に双方の機能をつなぐ形で建つ新棟は、子どもからお年寄りまで多様な患者層とその家族を受け止め、それぞれの個性を生かしながら未来をつくる新しい「五色会」の顔となり、屋上を囲うルーバー状の円筒形が五色会の中心を表します。限られた敷地により地域の中で突出して高層化せざるを得ない状況を前向きにとらえ、

新棟全体を巨大な「ゲート」と見立て、病気という難から一時的に雨宿りできる「大きな庇」で囲うことで、誰もがアプローチしやすい病院であることの象徴としています。

■外来空間の充実

病院を訪れる人達がまず目にするのがポニーと一緒に触れ合える公園（セラピーガーデン）です。工事着手後まもなく隣接田畠を取得できたため、改築と同時に整備が行われました。この公園から続く緑地の先にエントランスポートがあり、玄関へと続きます。総合待合には、内部と外部の境界をやや曖昧にした大きな窓を設け、周囲の田園風景を取り込み、地域にも開かれた空間としています。主要廊下から少し奥まった場所に、柔らかい外光が入る外来待合を設けました。人々が行き交う所に熱帯魚の水槽や竹細工アート等により診察を待つ間も大人から子どもまで楽しめる仕掛けが加えられています。

■安心できる居場所

新病棟は、日常生活から一旦離れ、時間を掛けながら症状緩和と生活バランスを取り戻す場として「個の領域」を保てる個室を基本としています。個室には気分に合わせて景色、風、匂い、音を自由に室内に取り込める窓があり、他者の視線や匂いを気にすることなく過ごせる環境を用意しました。個室近くにトイレ・洗面を配置し、その

先にリビング・ダイニングや浴室等の共用空間を設けています。入院生活の状況に応じ、自分だけの小さな領域から、徐々に普段の生活に近い環境へと領域を広げやすくなっています。

一方でスタッフ拠点は、さりげなく患者の気配が感じ取れる工夫や、保護室群への専用通路、他病棟との連携に配慮しています。2階病棟は、急性期患者の受け入れを行う既存病棟の拡張であり、個室化と隔離治療空間の充実を図っています。3階（将来4階含め）病棟は、主に18歳までの児童・思春期を対象とした専門の児童思春期病棟で、暮らしの場（病棟）から踏み出した先に学び舎と運動の場（院内学級・ジム）があり、学びや遊びなど暮らしの多様な時間を安全に過ごすことができる環境を用意しています。



全体配置図



総合待合と受付



2階病棟 リビング・ダイニング



総合待合とゆるやかに繋がる外来待合と診察室



個室4床をコンパクトにまとめた病室群

■運営しながらの合理的な構成へ転換
3年半をかけ2期に分けた解体・建築工事を行いました。仮設外来機能を持つ新デイケア棟が先行して計画され、増改築計画の課題の一つは既に対応が取られていきました。1期工事では、病床数を維持したまま改築を行う必要があり、限られた建築エリアに20床3フロアの病棟や外来他、管理諸室を組み込み成立させています。2期工事では、不足していた機能を増築すると

ともに、既存棟も含めスタッフエリアの再整備や、老朽化と狭隘化が進んでいた厨房の全面改修を行いました。

今回の増改築工事により、既存棟と新棟の間に庭園を設けています。新棟の日陰も心地よい空間と思えるようベンチを配し、そこに木々が彩りを添え、既存病棟にも光と緑を取り込む空間を新たに生み出しています。

(文責 山下健司)

□建築概要

建 築 主：医療法人社団 五色台

所 在 地：香川県坂出市

病 床 数：280床（精神科）

（内増改築60床/改修6床）

構造規模：鉄筋コンクリート造

地上6階

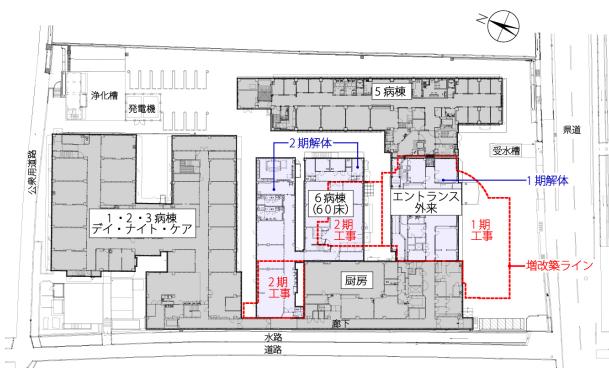
延床面積：14,133m²

（増改築：5,209m² 改修：1,552m²）

竣 工 年 月：2025年8月

撮 影：合田建築写真事務所

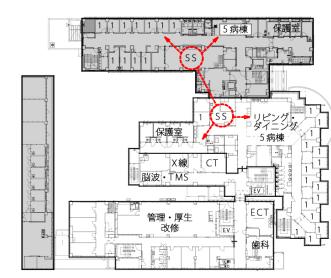
新デイケア棟仮設外来／セラピーガーデン：
後藤哲夫建築事務所



既存建物配置



増改築完了 1階平面図



SS：スタッフステーション

増改築完了 2階平面図



西側外観 幹線道路に面して病室が並ぶ

富山市で地域に根ざした精神科医療を継続されている病院の移転新築プロジェクトです。入院患者だけでなく、社会復帰し地域の中で暮らす障がい者へのサポートにも幅広く取り組まれており、その核となる病院がより地域に開かれた病院であるべく、建築側からも体現することを追求しました。

■幹線道路沿いに建つ市街地の病院

新病院は既存病院の向かい側への移転であり、交通量の多い幹線道路に面しています。周辺店舗の賑やかさの中でどのようにして存在感を出し、アクセスしやすくするかが求められました。主に市中心部からのアプローチ側に外壁面と外構に象徴的なサインを配し、

主玄関へ導いています。冬季における雨や雪に配慮し、広がりのあるピティで車の乗降ができるようにしたほか、駐車場側にも庇を繋げて安全に通行できるようにしました。

■安心感のあるエントランスホール

病院を訪れて最初に対面するエントランスホールには、ゆったりと座ることができる拡がりのあるスペースを用意しました。絵画を壁画全体に表現するアートウォールによってさりげない賑わいを演出しています。

一方で、このホールから緩やかに繋がる待合は、風合いを持たせた左官の壁を間接光で柔らかく照らし、診療前にリラックスできるよう落ち着いた空間としました。

■連続的に繋がる病室と水廻り

新敷地は道路に面して横に細長い形状であることから、病棟も病室が主廊下に面して横並びで長く展開します。病室が主廊下にすぐに面するのではなく、風と光を感じる光庭と、水廻りや談話コーナーを挟む構成にしました。

患者にとって洗面所やトイレという日常生活に必要な機能の近くに光庭やベンチがあることで、病室から一步出た先でコミュニケーションが生まれる場所となることを期待しています。主廊下の途中には扉を配置し、エリア分けできるようにしています。患者の属性や病状に応じてユニット的な運用ができるだけでなく、感染時の対応にも有効と考えます。



十分な拡がりをもつエントランスホール



外来診療待合

■安定した個別スペースのある4床室

4床室は、個々のベッドが窓を有し、袖壁によって三方が囲まれた領域を持つ「個室的4床室」としました。間口を抑えたコンパクトな面積の中に一人で落ち着いて過ごせることができる空間を実現しました。各病棟にはいくつか仕様の異なる個室群も配置し、患者の状態に応じて相応しい環境を選べるようにしました。

■地域とともにみらいに向かう病院

今回新たに病院名となった「みらい」からは、精神科医療がより身近になり地域生活に溶け込んでサポートしていく新しい病院像を感じられます。この病院の想いを支える建築が、地域の中に自然体で寄り添う場所となることを目差し、完成しました。

(文責 小島千知)

□建築概要

建築主：医療法人社団 重仁会
所在地：富山県富山市
病床数：139床（精神科）
構造規模：鉄筋コンクリート造 地上4階
延床面積：5,178m²
竣工年月：2025年10月
設計監理：福見・共同建築設計監理共同体
撮影：増田寿夫写真事務所
エスエス・北陸支店（※1）、所員（※2）



病室前に広がる光庭や談話ベンチ



病棟リビング



ベッド毎に窓と袖壁で囲まれた4床室



談話コーナーとアートウォール（マグネット掲示版）



病室ごとにカットの異なるサインデザイン（※2）

■VI *計画とアートディレクション

「地域社会との対話・融和」を目指す新病院として、地域のランドマークとなる外観デザインはもとより、新病院名「みらい」をイメージする新ロゴマークの作成、サイン計画、各種印刷物やホームページのデザインなども建築計画に組み込み、トータルに提案しました。グラフィックはデザイナーとコラボレーションしています。

外壁タイルに採用している日本の伝統色「深紫（こきむらさき）」は、バラ

ンスを回復させる癒し効果の高い色として、ロゴマークの色合いにも組込んでいます。

インテリアにおいては、のどかな山並みの原風景をやわらかい色彩で表現した描き下ろしのイラストを大小さまざまアートウォールやサインに取り入れ、温もりのあるタッチで和やかで落ち着いた空間に何気ないやさしさを印象づけています。

（福見建築設計事務所 本安真紀）

* VI : ビジュアルアイデンティティ（視覚的統一）



外来待合アートウォール（※1）



夕景にサインが映えるエントランスまわり外観



東側外観



エントランスホール



リハビリテーション室



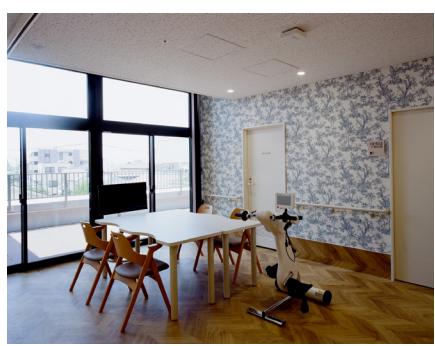
病棟エレベーターホール



4床室



1床室



病棟談話コーナー

東京都足立区を中心として、長らく在宅医療など地域に根ざした医療と介護の幅広いサービスを提供してきた法人が開設した、回復期リハビリテーション病院です。急性期医療を終えた患者が、在宅復帰や社会復帰を目指し、住み慣れた地域に帰るための医療を提供し、暮らしへと繋げる場となります。

■住み慣れた景色・暮らしに近い空間で、日常へ帰るための医療を届ける

医療施設としての機能の確保はもちろんのことですが、できるだけ暮らしに近いスケール感を意識し生活に戻っていく場にふさわしい空間づくりを目指しました。暖かみのある色彩計画と木調やアルルをベースとしたインテリアデザインを取り入れることにより、医療施設ながらもリラックスできるやわらかな雰囲気の中で治療やリハビリを行うことができます。

また、限られた敷地面積と日影規制による高さの制限がある中、いかにして必要な機能を確保できるかということもテーマのひとつでした。構造・設備の効率化による階高の抑制や、スタッフステーションを病室および外部に面した談話コーナーで囲む形とした病棟、エントランスホールから直接広がるリハビリテーション室など、結果としてその制約が住まいに近いスケールでそしてスタッフにとって目が届きやすい医療空間を形成することに繋がりました。

■夏型結露対策

昨今の気候変動により増加している夏型結露の対策として、特に外気の影響が大きいホールなどには、天井内に除湿機を設置しました。将来増設が可能となるように他の部分にもコンセントと点検口を準備しています。

(文責 坂本昌子)

□建築概要

建 築 主：医療法人社団 福寿会

所 在 地：東京都足立区

病 床 数：81床（回復期リハ）

構造規模：鉄骨造 地上6階

延床面積：2,757m²

竣工年月：2025年4月

撮 影：増田寿夫写真事務所



エントランス側外観



プライバシーの高いベッド廻り空間

神奈川県秦野市の市街地に建つ透析治療を専門とするクリニックです。

主たる透析室は、法人のコンセプトである、「ブースで囲まれたプライバシーの高い半個室の透析ベッドで構成された治療室」を実現しています。スタッフはブース間を巡回しながら見守るため、情報等の拠点を端部に設けました。一方で患者の高齢化や感染時などに対応するため、見守りを重視したカーテンで仕切られた室、感染時に外部から直接アクセスできる「完全個室」の治療室を用意しました。

週に数回治療に通い長時間過ごす患者のために、日常に寄り添いリラックスできる空間を追求しました。照明や患者のアメニティにも配慮し、特に透析中に長時間見上げる天井は、間接照明で柔らかく自然な明るさを確保し、手元灯とあわせて個々の環境を選べるようにしたほか、ブース内の各装備も



個室ブースによって仕切られた透析室



エントランスホール

詳細に配置を検討して決定しました。

これまで法人が継続してきた安心感のある透析治療がこの新クリニックで継承されつつ、地域のシンボル的な存在になることを願います。

(文責 小島千知)



クリニック鳥瞰全景

□建築概要

建 築 主：医療法人 桃一会

所 在 地：神奈川県秦野市

施設内容：人工透析クリニック

構造規模：鉄筋コンクリート造一部鉄骨造

地上 2 階

延床面積：1,739m²

竣工年月：2025 年 7 月

■建築デザイン及び色彩計画

敷地南側への低層配置、地域の基準に準じた色彩計画、再生木ルーバーや壁面の分節による周囲への圧迫感の軽減等、周辺環境へ配慮した地域に馴染む建築とする事で、日々通院する患者が気兼ねなく訪れるこことできる建築を目指しました。

片持ちの大きな庇は機能的でありますながら人を迎える象徴的な空間として作り、待合空間については、異なった環境の待合を複数作ることで、限られた面積の中でも自身に合った待合場所を選択できる計画としています。

「患者様一人ひとりを大切にケアする」という法人の理念の基に、患者の日常の一部となる空間が、より豊かであり、安心感を持って過ごせる環境となるよう設計をしました。

(設計監理協力 大山純矢)



増築棟に新しく設置された救急エントランス



改修により新たに設置された救急スタッフステーション



改修により新たに設置された個室 ICU



一般の車寄せからの増築棟ファサード



新たに設置された IVR-CT

札幌市東区において「年中無休、24時間オープン」の救急医療を提供し「断らない医療」を実践している法人の要となる救急部門の増築、改修のプロジェクトです。道内初となるIVR-CTを擁したハイブリッドER(診断から治療まで行う部屋)の増築棟への設置に合わせ救急部門内における各室の配置と連携の最適化を図りました。

■機能拡張と連携強化

ハイブリッドER設置にあたり救急部門のエントランス位置を新たに増築棟へと変更し、それに合わせERや時間外外来の配置を見直しました。増築を単なる機能の追加ではなく連携強化の新しい契機と捉えたことで、新しい機能拡張に相応しい連携を実現しました。合わせて既存動線との繋がりも見直しを図り、既存病院からの画像診断の一般利用動線、時間外の利用動線と救急動線を明確に分離することを可能にしました。

また救急入口を見直したことによ

り、増築工事から内部改修工事の完了まで切れ目なく救急部門を稼働させることができるようになり、病院の方針である「年中無休、24時間オープン」の実現にも寄与しました。

■使いながら工事を可能にする改修ステップ

救急部門の増築改修に合わせ、ICU、HCU部門の改修も実施しました。医療現場におけるスタッフの協力のもと、設計段階から予め複数のアクセスを設定するなどの工夫をした上で、改修ステップを設定し、医療提供を継続したまま改修工事を無事に完了することができました。

昨今の建設費高騰のあおりを受け、ポイントを絞った増築改修は今後多く発生するプログラムだと考えています。そのような状況であっても、本質的な機能を見つめ展開される活動をイメージすれば、新たな価値を生み出すことができる再確認したプロジェクトでした。

(文責 田中岳人)

工事前



工事後



増築改修エリアと動線の見直し

□建築概要

建築主：医療法人 徳洲会

所在地：北海道札幌市

構造規模：鉄筋コンクリート造（既存）地上8階
一部鉄骨造（増築）地上2階

延床面積：38,184m²

（増築：805m² 改修：2,326m²）

竣工年月：2025年2月

撮影：新津写真



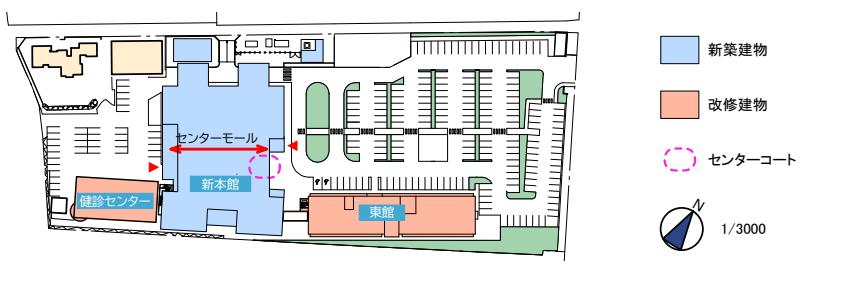
敷地鳥瞰全景※2



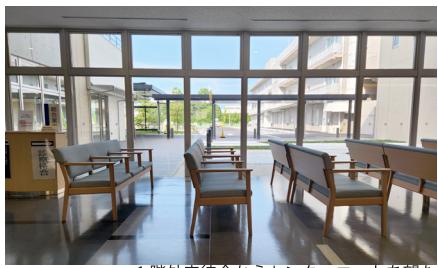
新病院棟全景※1



センターモール



配置図



1階外来待合からセンターコートを望む

地域医療を未来へ支えていく拠点として

社外報 2024(Vol.25) では新病院棟の建設を中心に、その計画意図と整備内容を報告しました。今回はその後に実施した既存棟の改修・解体、さらに旧病院棟跡地の駐車場整備を含め、プロジェクト全体の完了までについて紹介します。

■センター コート

既存棟を継続して活用しながら新棟を建設するという制約のもと、建設用地に平面的に貫入する形で残されていたMRI棟の跡地を、新棟完成後にセンター コートとして整備しました。

外部吹抜けとなるこの空間は、1階では外来待合と緩やかにつながり、2階では売店前のラウンジに面して配置され、どちらの階からも光や風の抜けを感じられる開放的で居心地のよい場を提供しています。屋外の気配を建物内部へやわらかく取り込み、院内環境を穏やかに支える場として計画しました。

■センター モール

外来・検査・放射線など、外来患者が利用する主要機能を束ねる内部動線軸として計画されたセンター モールは、病棟階へと上がるエレベーター ホールにも面し、建物内の分かりやすい動線を形成する役割を果たしています。この内部における明快な動線軸は、既存棟と新病院棟をつなぐ中核となり、今後の建替えやの方向性を示す将来全体計画の軸としても機能します。これにより段階的な施設更新を可能にし、病院全体の成長と変化を長期的に支えるフレームとして位置づけられます。

人口減少と高齢化が進む地域において、医療を将来へつなぐことを本計画の根幹に据え、将来の更新にも対応できる建築構成を目指しました。

地域に根ざした医療法人が築いてきた信頼を次世代へ継承できるよう、「センター モール」を核とした拠点として、未来の地域医療を支え続けられる病院建築を提供しています。

(文責 若松将人)

センター コート
左手に見える景石は旧本館に据えられていたものを継承

既存 MRI 棟を活かしながらの工事状況

□建築概要

建 築 主：医療法人社団 亮仁会

所 在 地：栃木県大田原市

病 床 数：169床(一般 96床 / 療養 73床)

構造規模：鉄筋コンクリート造一部鉄骨造

鉄骨鉄筋コンクリート造 地上3階

延床面積：11,811m² (増築 7,287m²)

竣 工 月：2025年5月

撮 影：病院職員(※1)、

DI・SANWA CORPORATION(※2)

所員(※1, 2以外)



外部から自然に人を誘い込む新西棟アプローチ

長野県上田市で二十数年前から継続的に建替えを行ってきた精神科病院の増改築計画です。今回の建替えでは、「病棟を増築2棟の拡張により再編成する計画」と「より地域に開かれた病院としての役割を担う機能を新西棟に付加する計画」の2つを軸に整備を行いました。

■既存と調和する「新しいファサード」

外観は長年愛されてきた既存棟との調和を重視し、基本となる白系タイルを素材や目地色を使い分けて組合せ、淡い青色タイルをポイントに、ディテールも工夫して構成しました。

新西棟のファサードは「地域に開く」機能を、これまでの病棟の外観とは少し異なるものとして表現するべく、温かみのある木ルーバーや左官材、内外をつなぐ庇などを採用し、外部から自然に人を誘い込む佇まいとしました。

■地域との接点となる場所

新西棟のエントランス廻りは、地域との接点をつくるコミュニティプラザ



地域との交流広場「プラタナスホール」
外の光と連動して調光・調色を行う照明を採用

ともいえる場です。売店や美容室、就労支援の場となることを想定した店舗を展開することで、院内外の人が集う様々な空間を生み出しました。

内装デザインは、患者にとっては病棟とは異なる雰囲気を感じられ、スタッフにとってはリフレッシュのきっかけとなるようイメージしました。

■再編成により特徴のある病棟を実現

既存から拡張する形で、救急病棟に準保護室・保護室を増やしたユニットを増築し、より多様な患者を受けとめる急性期医療の環境を整えました。個室率を高めるとともに、スタッフの見守り拠点も新設し、安全性とプライバシーを両立させながら、患者の状態に応じたケアを提供できるよう計画しました。

建築には医療を支え、地域に精神科医療への理解を広げる力があると信じ、既存棟と同じように長く愛される建物となるよう心掛けました。

(文責 木戸裕里子)



ラウンジやガーデンへと繋がるギャラリー
石畳調の床材を用いて路地のような空間を演出



明るく開放的なレストランと内外をつなぐ庇



軽運動や講演会等多様な使いができる「けやきホール」



増築外来エリアへと続く「アカシアホール」



個室群に近接した水廻り等の生活スペース



精神科療養病棟 1 床室

□建築概要

建築主：医療法人友愛会

所在地：長野県上田市

病床数：230床（精神科）、（今回整備 57床）

構造規模：鉄筋コンクリート造一部鉄骨造

地上5階（新西棟3階／新南棟4階）

延床面積：13,280m²

（増改築 3,141m² 改修 1,104m²）

竣工年月：2025年11月

撮影：増田寿夫写真事務所



療養階をポラリスホールに改修

隣接する宮地病院と共に地域を支えてきた「介護老人保健施設あずさ」(以下 老健)が、移転新築に伴い老健としての役割を終え、新たに病院を支援する複合施設としてコンバージョン(※)を行ったプロジェクトです。

住宅街に建つコンパクトな52床の老健を、できるだけ骨格を活かしながら、地域に分散していた病院関連部門を集約しました。

病院へと繋がる1階玄関廻りには、もと食堂を活かして在宅支援部門を配置し、来訪者も訪れやすい構成しています。地階の大浴室や機能訓練室は、

簡易改修にとどめ約350名の職員更衣室やスタッフ休憩スペースとしました。

2階は、分散運営していた保育所をひとつにまとめ、元療養居室の間仕切を取り除き、横長の保育空間を設け、乳児・幼児を緩やかに分けられる保育室としています。3階も同様に間仕切を撤去し、柱に鏡を貼り、配管は竹で囲う等、目線を遮るものを極力減らし、地域住民も利用できる大空間「ポラリスホール」として生まれ変わらせました。

(文責 範國幸子)



療養室群を保育所に改修



食堂を事務室に改修

□建築概要

建築主：医療法人 明倫会

所在地：兵庫県神戸市

施設内容：老人保健施設を地域支援事業所・保育所他に転換

構造規模：鉄筋コンクリート造
地下1階 地上3階

延床面積：1,446m² (全面改修)

竣工年月：2025年6月

撮影：所員

※コンバージョン

建築物がある用途から別の用途に変更するために修繕、改修、増築を行うこと。(公共建築協会リノベーション・コンバージョン部会冊子より引用)

心が息づく建築

精神科病院の設計から考える建築の本質

BOOK



このたび、長年取り組んでまいりました精神科病院の設計活動を通した建築への思いを、『心が息づく建築』という一冊にまとめました。

普段の建築界における議論の中ではなかなか語ることができない内容ですが、長年弊社において私達が取り組んできた活動を通して見えてきたものをできるだけシンプルにわかりやすく表現したつもりです。

建築家としての自分の思いを一度整理するため、この思いを若い世代に伝えるため、そして皆様からのさらなるご指導をいただきたいという想いを込めて、本書を上梓いたしました。

ご高覧いただければ幸いです。

(鈴木慶治 / 共同建築設計事務所ホームページより)

著者：鈴木慶治

出版社：幻冬舎

発売日：2025年8月29日



全景



2階 ショートステイのリビングダイニング



1階 地域交流室



1階 事務室

福岡市の近郊の山間に位置する『障がい者支援施設 宰府園』の増築プロジェクトです。社外報 2023 年号で紹介した『アクティビティセンター・コミュニティホール さいふ』(以下 さいふ)に続く、「子供から高齢者まで利用できるサービス」「障害の重い人も、家族も利用できるサービス」「生活の基本を大切にする適切なサービス」「気軽に立ち寄れる場所」をテーマに地域生活支援センターが完成しました。

1階は、地域で暮らす利用者のため相談支援サービスを行う相談支援室を中心に、食堂・多目的室・作業室を配置し、2階には、ショートステイや家族室とその関連施設の部屋を計画しました。高低差のある敷地ですが、「さいふ」の2階からアクセスしやすく、相互の行き来が容易となり、利用者はもちろんスタッフの利便性に寄与しています。

(文責 田中嘉和)

□建築概要

建 築 主：社会福祉法人 宰府福祉会

所 在 地：福岡県太宰府市

施設内容：地域生活支援センター

日中生活活動（20名）

短期入所施設（6名）

構造規模：木造 地上2階

延床面積：802m²

竣工年月：2024年11月

撮 影：ティエムフォート

第2宰府園やまもの設計を皮切りに、「ひとり一人を大切に」という宰府福祉会のモットーに寄り添い、右に紹介する施設を共に手がけました。

1998年

障害福祉サービス事業所 やまもも

(旧称 知的障害者通所更正施設 第2宰府園やまもも)



掲載書籍

『建築設計資料集成 福祉・医療』(2002.9)

『建築設計資料49 障害者の地域活動拠点』(2003.12)

2013年

やまもも・すみれ相談支援センター



共同支援援助 グループホーム やまもも



2019年

児童発達支援センター すみれ園



2022年・2025年

アクティビティセンター・コミュニケーションホール さいふ
宰府福祉会 地域生活支援センター



社外報 2026 Vol.27

発行年 2026 年 春

発 行 株式会社 共同建築設計事務所

編 集 高橋良江 小林千絵子 伊藤華子
本常利恵 及川純子



株式
会社 共同建築設計事務所

KYODO ARCHITECTS & ASSOCIATES

www.kyodo-aa.co.jp

□本 社	〒 160-0008 東京都新宿区四谷三栄町 4-10	TEL 03-3359-6431	FAX 03-3359-6449
□東北支社	〒 980-0022 仙台市青葉区五橋 1-4-24	TEL 022-722-0915	FAX 022-722-0917
□関西支社	〒 553-0033 大阪市東淀川区東中島 1-17-18	TEL 06-6195-3621	FAX 06-6195-3622
□九州支社	〒 812-0011 福岡市博多区博多駅前 3-23-12	TEL 092-473-7370	FAX 092-481-3298

